

コミュニティデザイナー山崎亮さんに聞く

SDGsに必要な“取り組み”と“リテラシー”

2020/03/31

さまざまなジャンルで活躍されている方々に、広く SDGs にどう取り組んだらいいかというヒントを聞くインタビュー企画。

今回は、コミュニティデザイナーとして活躍する山崎亮さんに聞きました。地域の人々をワークショップと呼ばれる手法でつなぎ、巧みなファシリテートと豊富な知識で“持続可能なチーム”に育て上げる山崎さん。2030 年そしてそれ以降という大きな目標に対して、持続可能な取り組みのヒントとして、チームづくりの要であるワークショップの基礎知識、そして、SDGs 達成のために必要なリテラシーについて伺います。



山崎亮氏

株式会社 studio-L 代表取締役

大阪府立大農学部を卒業後、メルボルン工科大環境デザイン学部を経て、大阪府立大大学院（地域生態工学専攻）を修了。設計事務所に勤務したのち、2005 年に studio-L を設立。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。慶應義塾大特別招聘教授。主な著書に『コミュニティデザイン』（学芸出版社）、『まちの幸福論』（NHK 出版）などがある。

チームづくりに効く、ワークショップのきほん

——初めまして！ 山崎さんは、studio-L という会社で、コミュニティデザインを手掛けていらっしゃると思いました。いきなりで恐縮なのですが、コミュニティデザインって、どんなお仕事なのでしょうか？

山崎：コミュニティ（共同体、地域社会）の方々と何かをデザインするお仕事です。主にワークショップと呼ばれる方法で人と人とを結びつけて、さまざまな課題に立ち向かうための強いチームをつくることに取り組んでいます。

——ワークショップについて詳しく教えてください。具体的にどんなことを行うのでしょうか？

山崎：ワークショップとは、参加者が自由に意見を出し合いながら学びや創造を行う手法です。主にファシリテーターと呼ばれる司会者の問いかけや誘導によって進行していきます。もっとも一般的なのが、5～6 人のチームに分かれ課題について話し合う形。チーム全員の意見や疑問を付箋に書き出して、その付箋を分類しながら考えを整理していきます。他にも、例えば、床にマスキングテープを貼ってポジショニングマップのようなものをつくり、該当する箇所に移動してもらって、集まった人同士で話し合う手法や、歩き回ってたまたますれ違った人と言だけ言葉を交わす手法など、いろいろなやり方があるんですよ。

——なるほど。コミュニケーションの手法のようなものなんですね。

山崎：はい。1960 年代にアメリカの環境デザイナー、ローレンス・ハルプリンが、まちづくりの分野にワークショップの手法を採り入れたと言われています。現在では、100 種類ぐらいのやり方があるとされていますね。

——100 種類も！ 山崎さんは、すべて覚えていらっしゃるんですか!?

山崎：だいたい頭に入っています。ただ、100 種類のどれかを忠実に行うのではなくて。参加者の年齢構成や男女比などを考慮しながら事務所のみんなでアイデアを出し合って、オーダーメイドのワークショップをつくっています。考えたワークショップは試験的にやってみて、「説明がややこしすぎる」だとか「難しい」だとか、意見を言い合いながら修正しています。

地域にはいろんな方がいらっしゃいます。そもそも課題の解決に興味がない人や、行政に対して不信感を持っている人、変わらない現状に不安や怒りを感じている人など……。こうした人に、当事者として、前向きに、課題の解決に向けた議論に参加してもらうには、さまざまな方法を駆使して会話や意見を引き出すことが欠かせないのです。恥ずかしいという思いを取っ払って、自分をさらけ出し、そして本音で話してもらう。地域や参加者に合ったワークショップでこうした環境をつくり、みんなで議論することで、課題が自分ごとになって動き出していくんですね。



——会社や学校などのコミュニティをよりよくするためにも効果的なように思えます。初めての人がワークショップをファシリテーションすることは、やはり難しいでしょうか？

山崎：いやいや、そんなことはありません！ いきなりオーダーメイドのワークショップを行うのは難しいかもしれませんが、5～6人のチームをつくって模造紙に付箋をペタペタしながら行うワークショップであれば初心者の方でもできると思います。基本のワークショップを何回かやると、盛り上がるどころやつまずくところが見えてきます。そうしたら、そこに工夫を加えればいいんです。実際、僕たちも、やりながら、反応を見ながら、調整しているんですよ。

ワークショップは、新しいことを始めるときや難しい課題に取り組むときのチームづくりに、とても適した手法だと思います。自由に意見を出し合うことで、課題や活動が自分ごとになっていき、仲間意識が芽生え、よいチームに育っていく……。うまくいけばファシリテーターなしで活動が持続していくはずですよ。

「それって正しい？」、まずは自分に問いかけてみよう！

——コミュニティデザインというお仕事だけでなく、関わっていらっしゃるプロジェクトも、福祉、教育、地域創生など、まさにSDGsに合致していますよね。これらさまざまなSDGs的プロジェクトに関わるなかで、特に課題だと感じるのはどのようなところでしょうか？

山崎：最大の課題は、僕たちの頭に「数字の拡大こそ良いことだ」「自由こそ良いことだ」という新自由主義的な思想が根付いてしまっていることです。

——新自由主義とはなんですか？

山崎：大幅な規制緩和や市場原理主義を重視する経済思想です。1980年代に登場した考え方で、フリードリヒ・ハイエクなどの思想家が主張しています。この考えに基づいて行われたのが英・サッチャー首相によるサッチャリズム、米・レーガン大統領のレーガノミクスといった経済政策。国営企業の民営化や規制緩和、減税などが行われました。

要は、「儲かるか」「数字で見返りがあるか」みたいなことを重視してしまう思想ですよ。また、本来は自由という概念のなかにある種の規制やモラルなど、

もう少し複雑な概念を入れ込まなければいけなかったのに、「世界中で規制なく自由に経済活動を行えることが良い」といったような考え方をしているところも問題なのではないかと思います。

——その数字主義的な考え方を変えるために、わたしたちには何ができるでしょうか？

山崎：そのためにやってほしいのが、「それって、正しい？」と自分自身に問いかけること。なにか新しい取り組みや事業を始めるときに、儲かるかとか、得するかとかではなくで、人として正しいこと、なすべきことをしようとしているかを考えてほしいのです。自分のなかにある自然性とか人間性……生まれ持ったピュアな感覚を信じてみてください。

実はSDGsという概念が登場する150年ぐらい前に、アメリカの超越主義者の人たちが、「環境に配慮するということは、自分自身を信頼することだ」ということを言っているんですね。ラルフ・ワルド・エマーソンという思想家や、その弟子のヘンリー・デイビッド・ソロー、それらに影響を受けた建築家のフランク・ロイド・ライトなど……。彼らは人間を含むあらゆるものを構成している最小単位について考えていて。それは元素なんじゃないか、人間を構成しているものの最小単位ってたぶん木や石など自然にあるものと同じなんじゃないかと考えていたんですね。で、「自然の一部である自分自身を深く信頼し、これこそが正しいことだと確信して出したアイデアは、自然環境に負荷を与えないものであるはずだ」ということを述べているんです。

——その考えは、SDGsをどうビジネスに生かすか迷っている方々にとっても、大きな後押しになりそうです。SDGsは本来「〇〇しなければならない」とアクションを細かく規定するものではなく、個人や企業の強みを生かして理想の世界を作り出すことですからね。

山崎：ですよね。ですから、やれSDGsだ、17の目標のうちどれを目指すか、みたいなことは取っ払って、「それって、正しいの？」だけを意識して行動すればよい、そうすれば自然や環境にやさしい行動が生まれるのだと思います。だって自然も人間も元は同じものなのだから。

SDGsは、人としてやるべきことや正しいことを追求し、あとから「ところで17個の目標のうちどの辺に貢献できているかな」とチェックするようなものなのではないかと思います。



自分の興味を遡っていく、濃くて楽しい“リテラシー”の旅

——ちょっと SDGs から話がそれてしまうのですが、山崎さんは、いったどのようにして、それだけの知識をインプットしているのでしょうか？ 知識量が研究者に近いレベルのような……。

山崎： いやいや、そんなことはないです。ただ、興味がある人物や事柄を芋づる式に調べていくということはいつもやっていました。僕が SDGs に関する知識を得るようになったのは、経済学者の宇沢弘文さんに興味を持ったのがきっかけ。宇沢さんは、社会的共通資本や自然を重視する SDGs 的、コミュニティデザイン的な考え方を持っていた方で。彼が制度派経済学で知られるアメリカの経済学者・ヴェブレンの本を書いていると知り、その本を読んで、次はヴェブレンの弟子筋のガルブレイスという人に興味を持って……という感じに、どんどん調べて本を読んでいきました。

——先ほど登場した超越主義に関する知識もそうやって得ていったんですか？

山崎： はい。僕、もともと農学部出身なんですよ。農学部の考え方に、ちょっと超越主義的な要素があって。それでソローの『森の生活』という本を読んで、ソローがエマーソンの弟子であることを知り、ソローやエマーソンに影響を受けた人のなかにフランク・ロイド・ライトという有名な建築家がいることを知

って。そういう流れのなかで、超越主義に関する知識や感覚が入ってきたのだと思います。

SDGs は、哲学、経済学、人智学、あらゆる学問や歴史に通じているものでもあると思います。この辺のリテラシーというのは、教養として、本当は日本人全員が持っていたほうがいいんじゃないかと思います。生きていく上で武器になるというか。

——私たちがそのリテラシーを身につけるには、どんな工夫が必要でしょうか？

山崎：難しく考えることはありませんよ。例えば好きな作家やデザイナーの本から入っていけばいいんです。そこから、関連する人物や事柄をどんどん遡っていく。これは、結構、楽しい旅だと思います。

さまざまな知識を楽しみながらインプットし、「人として正しいか」を基準に行動を決めていく。SDGs には、まずこのふたつのことから入っていけばよいと思います。とっても簡単でシンプルなこと。ぜひ難しく考えずに、向き合ってみてほしいですね。

